

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「茶」は三煎？して・・・・・・・・・・味わう？～

令和4年度も本格的にスタートしました。1年生は来週から蒜山の大自然の下でオリエンテーション合宿が行われ、2・3年生は、春の京都への遠足が行われます。新しい学校の、新しい学年の、新しいクラスのメンバーとの親睦を深めてもらいたいと思います。さて、1年に1度訪れる新茶の時期は、立春から88日数えた5月2日前後にあたる八十八夜。この時期には、静岡県をはじめとする各地域で茶摘み体験などのイベントも行われています。ところで・・・「めちゃくちゃ」って漢字で書けますか？・・・・・・・・「滅茶苦茶」って書きますが、その語源は・・・「芽茶苦茶」だそうです。

安岡先生から「茶は三煎して味わう」と教えられた。

浄境に栽培された芽茶（めちゃ）に最初はややぬるめの湯をかけて、芽茶のもつ甘さを味わう。

この甘いという味は、味の初歩的なもので、幼児にも未開人にもよくわかる。

だから、人間も未熟なうちは「あいつはまだ甘い」ということになる。

次の第二煎は、少し熱くした湯でタンニンのもつ渋さを味わう。

この渋いという味は甘さよりは一步進んでおり、人間も中年近くなってやっと、「渋い魅力がでてきた」といわれるようになる。

第三煎は熱湯を注いで、カフェインのもつほろ苦さを味わう。

この苦いという味は、人生も五十をすぎないと、ちょっとわかってこない。落（ふき）のトウで酒を楽しむ年代である。

ところが、この茶の心得のない人間は、せっかくの芽茶にいきなり熱湯をかけるから、甘さも、渋さも苦さもごちゃごちゃに出てしまって、風味もなくなり、単にニガニガしい味になってしまう。

すなわち、「メチャクチャ(芽茶苦茶)」の語源である。



青年とは、ある意味において、「甘さ」の段階しかわからない時代のことだ。

当然、「甘さ」を基盤にして勝手なことをいうが、これを「渋さ」も「苦さ」も十分知っている大人が叱ろうとしない。

変にもわかりのいいオジさんになっているところに現代社会の大きな欠陥がある。

青年とおとなとは厳しさを通じて結びつかなければならない。

青年を甘やかすようなおとながいたら、青年は警戒すべきである。

伊藤肇氏の『帝王学ノート』（PHP文庫）

甘やかされて育った子どもはたいてい、「わがままになる」「他人のせいにする」「打たれ弱い」「辛いことや嫌なことから逃げる」「まわりへの気配りや気遣いができない」「自分の要求が通らないとすねたり、すぐ泣いたり、怒ったりする」等の特徴があります。

残念ながら、いい年をしたオジサン、オバサンにもそういう自分本位の人は少なからずいますが・・・

これからの高校生活、思い通りに結果が出ず、厳しさを体験することもあるでしょう。そんな時に、なぐさめる、甘やかすではなく、倒れても、すぐに簡単に手を差ししのばさず、君たちが、歯をくいしばって、前を向いて、自分で立ち上がり、一歩踏み出し、次へ挑戦していく。それを先生方とともにサポートしたいと思います。君たちも覚悟を決めて、突き進んでください。



「厳しさ」という「優しさ」も実行できる、つまり「優厳実行（ゆうげんじっこう）」できる教師を・・・「有言実行（ゆうげんじっこう）」したいものです。